

不在の戦争、あるいは幼児（同）性愛
—『ダロウェイ夫人』のメタ心理学的（間）テキスト性をめぐる覚書—*

遠藤不比人

ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf）の主要作品『ダロウェイ夫人（*Mrs Dalloway*）』（1925）を論じる際の批評的な常套として、「戦争文学」あるいは「戦後文学」というカテゴリーが無批判な参照枠としてしばしば採用される。従来の読解のこのような制度性に対して、小論はあえてテキストにおける「戦争」の根源的な不在という点を問題にしたい。この議論を組織するにあたり決定的に重要なことは、ウルフの言語と同時代のメタ心理学的な精神分析との間テキスト性とも称すべき関連性である。第一次大戦が『ダロウェイ夫人』の言語に刻印したイムパクトを論じるにあたり、この観点から小論の読解が集中するのは、具体的な戦争への言及ではない。繰り返せば、むしろ「戦争」の不在というテキストにおける否定的（あるいは外傷的）なその存在論の様式にこそ小論は着目したい。こういった視点が前景化するのには、『ダロウェイ夫人』と同時代の精神分析、殊にフロイトのメタ心理学的思弁とが濃密に共有する独特の（間）テキスト性である。

ここでウルフの小説に即していうなら、『ダロウェイ夫人』と戦争ということになれば、おそらく誰もが最初に連想するのは、セプティマス・ウオーレン・スミスのことであるだろう。つまり、あのシェル・ショック（戦争神経症）という——間違いなくこの小説が出版された当時であって社会問題ともなった——テーマが即座にここで連想されることになる。当然その文脈で精神分析が戦後の臨床的な現場のみならず、より広い言説的な空間において果たした機能が注目されることにもなるはずだ。それを踏まえながらも小論が注目したいのは、次の事実——それはこのうえなく症候的／外傷的であるのだが——つまりは、実際にテキストがセプティマスを描く際に、彼が従軍をし、かつ致命的な心的な負傷（精神的な外傷＝トラウマ）を負った戦争それ自体への言及がほとんど皆無であるという事実である。戦争に関してテキストが読者に提供する情報は、彼の内的独白というよりは、妻のレッチア、雇用者であるブルーワ、要するにこういった第三者的な視点を通じて非常に断片

的な形でのみ伝達される。ここで基本的なレヴェルで踏まえるべきことは、シェル・ショック、あるいは戦争神経症を主題化するウルフのテキストは——特にセプティマスその人の内的意識を通じて「戦争」を主題化しようとするときには——戦争それ自体に関して雄弁であるどころか、或る種の欠語、言葉を失った事態に見舞われるという点である。

ちなみに、こういったテキスト的な事態に関して、たとえば『ケムブリッジ版20世紀英文学史』でデボラ・パーソンは「トラウマと戦争の記憶」という視点から一連の議論を試みている。そこで触れられるのは、ウルフのみならずフォード・マードックス・フォード、ベラ・ブリテン、D・H・ロレンス、T・S・エリオットなどで、パーソンは彼らの言語を読解しつつ大戦後のイギリスの言説空間を歴史化する基礎的な視点として「トラウマ=外傷」ということを問題とする。この議論が採用する具体的なレトリックを参照してみよう。

In the meantime, however, the war and its aftermath remained a gap or absence in history that resisted representation. The early post-war years, dominated by psychological bewilderment and social and economic uncertainty, were a limbo period in which the intensity of horror and loss could not be integrated into normal understanding. (177)

つまり「戦争」とはいかなる表象にも抗う「空隙」「欠如」、歴史に穿たれたどこでもない場所／いつでもない時間 (a limbo period)。あるいはこの議論の別のレトリック——‘the social and psychological chasm of the war years’ (176) ——でいえば、戦後の表象空間における「裂け目」。こういったレトリックが「外傷的」と呼ばれる大戦直後のテキスト的環境を特徴付けることになる。つまり、戦争と『ダロウェイ夫人』というテーマを考えると、テキストにおける戦争それ自体の「不在」ということが決定的な意味をもつ——この議論を小論も基本的な水準で共有する。

ただし、これは単に存在しないということではない。いささか先走ってしまえば以下のような言い方になるだろうか。殊にセプティマスに着目するとき、『ダロウェイ夫人』という小説にとって「戦争」とはある種の「不在の原因」である、さらに言えば、「戦争」はそこにそれ自体としては存在しないに

も拘らず、むしろ、それゆえにこそ、テキストの言語をときに攪乱し、駆動（drive）しつづける圧倒的に濃密な「不在」である——こういう逆説的なレトリックを採用することがここで有用である。後で触れるようにこのパラドクシカルなテキスト的事態はフロイトのメタ心理学的思弁、たとえば「快感原則の彼岸」のテキスト性を濃密に連想させるものでもある。¹⁾

ここで「トラウマ＝外傷」という精神分析的用語について少々言葉を添えておきたい。²⁾ 周知のようにこの概念が精神分析において特に問題となった契機は、フロイトが第一次大戦による戦争神経症に臨床的な現場で直面したことであった。主体が或る過剰な強度をもった出来事になんの予告もなく突如晒されたとき、主体はそれを通常の体験のように言語化、つまりは物語化するのを阻まれる。つまり「トラウマ＝外傷」とは主体の体験における言語化＝物語化できない「過剰な残余」ということになるだろう。ラカンの良く知られた用語を借用すれば、それは、それゆえに「リアル＝不可能な」強度を帯びることにもなる。主体が言語化できないということは——つまりは、物語＝ナラティブに収容できないということは——なにを意味するか。物語化、つまりナラティブに還元するということは、その出来事を「歴史化」つまりは主体の時間的な遠近法に然るべく配置し、その出来事を「過去化」することであると言い換えることができる。そのように考えるとき、物語化を逃れる「過剰な残余」としての「トラウマ＝外傷的」な出来事は、主体の存在を根源的に決定している象徴システム——さらに言えば、その象徴システムが可能にする時間的な遠近法——において、いかなる場所＝時間をもたない「もの」ということになる（それを定義上正しくフロイト＝ラカンのなdas Dingと呼ぶことができるはずだ）。

ここで或る逆説がある。主体を構造化（＝去勢）する象徴システム、あるいは時間的な遠近法にあっていかなる場所＝時間をもたないとは、逆説的に、そこにおいて、いついかなるときにいかなる場所でそれが出没するか同定できない、ということの意味する。物語化できない、つまりは、いつまでも過去とならない外傷的な出来事は、主体を「リアル＝不可能な」強度を帯びつつ不意打ちすることになる。言語化できない「過剰な残余」としての「トラウマ＝外傷」が「反復強迫」というプレブレマティックと連動する原因の一端がそこにある。トラウマ的な「出来事」は、主体の象徴システムに回収されるまでは、主体をこのような「リアルな」強度をとめない襲撃しつづける

わけである。そして、人間的な主体という徹頭徹尾言語的な存在にとって、言語化されない過剰な「リアル」の反復的な襲撃とは、「狂気」とほとんど隣接する事態となる。

ただしここで言葉を補えば、フロイトはこの反復強迫をめぐるメタ心理学的な思弁において、次のような驚くべき記述をしている。つまり、「快感原則の彼岸」のフロイトによれば、反復強迫とは主体による「外傷への固着」である。

患者は外傷に、いわば身体的に固着しているというわけである。このように体験への固着が生じ、疾患がこれを触発することは、以前からヒステリーにおいて明らかになっていた。ブロイアとフロイトは一八九三年に、ヒステリー患者の多くは、想起に悩まされていると述べている。戦争神経症の場合にも、フェレンツィやジンメルなどの観察者は、運動性の症候を外傷の瞬間に対する固着によって説明することができた。(124)

ちなみにフロイトはこの箇所付した註においてつぎのように補足する。

ある種のヒステリーにおいては、誘因となる事象が何年も経過した後に、媒介物なしに直接に患者に作用するのであり、ヒステリー患者の多くは無意識的な想起に悩まされている〔後略〕。(124)

後に触れるように、外傷の反復強迫（つまりは外傷への固着）というプロブレマティックには主体のマゾヒズムということが含意されることになるのと同時に、その「媒介物なしに直接に患者に作用する」強度は、定義上正しくラカンの言う「リアルなもの (the real)」のそれである。

さて、このような視点を得た後に先ほど触れたデボラ・パーソンの議論に戻れば、彼女は大战直後のイギリスの文学的な言説空間において、外傷的＝トラウマ的環境を集合的な水準で記述したのだと、そう整理することができる。第一次大戦という未曾有な出来事を表象する言語を失った戦後の文学テクストは、まさに集合的なトラウマ＝欠語に見舞われた——こういう視点を提出したことになる。実際、彼女が典型的な（症）例として引用するのが、看護部隊を通じて従軍経験があるマードクッス・フォードがまさに赤裸々に

告白するような戦争の根源的な表象不可能性であり、具体的に引用されるのは彼の「欠語」のテキスト的な刻印たる点線（……）である。具体的にパーソンが引用するフォードのテキスト的な欠語のありようを小論も孫引きしてみよう。

Mrs Evans-Mawnington, scowling, furious-mouthed, jealous...Mother smug, saccharine-sweet...shelves of mangled bodies...filthy smells of gangrenous wounds...shell-ragged, shell-shocked men...men shrieking like wild beasts inside the ambulance until they drown the sound of the engine... 'Nellie loves to be really in it'—no God to pray to because you know there isn't God—how shall I Carry on?... 'Proud to do her bit for the old flag.' Oh, Christ! Of Christ! (187)

そうであるのなら、「戦争」というトラウマ的な出来事を表象する言語をもたなかった大戦直後のテキストにおいて、「反復強迫」というプロブレマティークはどのようなレベルで問題となるのだろうか？ パーソンの記述にあってはほとんど本質的な水準で問題となっていないが、この設問を迂回することはできない。この設問から出発するとき、冒頭で触れたフロイトとウルフの言語が大戦直後において切り結ぶ或る濃密な間テキスト性が大きな意味を帯びることになるからだ。

ここで是非とも注目しておきたいのは、大戦直後に精神分析に「外傷」あるいは「反復強迫」という問題系を導入したフロイトの「快感原則の彼岸」が示す或るテキスト的な身振りである。あまりにも有名なことではあるが、このテキストの最初の重要なトピックは戦争神経症患者の夢において「反復強迫」される外傷的な出来事である。しかしながらここでなによりも瞠目すべきは、ほどなくこの主題的な関心が「幼児の性的な生活」へと移行していくという点である。

医師は抑圧されたものを、過去の一場面として患者が「想起する」ことを望むものであるが、患者は抑圧されたものを現在の経験として「反復する」しかないのである。こういった再現は、望ましくない忠実さをもって、つねに幼児の性的な生活、すなわちエディプス・コンプレックス

とその派生物の一場面を内容とするものであり、転移の領域、すなわち医者との関係において規則的に演じられるようになる。(133)

外傷的な反復という主題において、突如（戦争神経症という）文脈を逸脱して前景化される「幼児の性的な生活」——これは大戦後のフロイトのメタ心理学的な精神分析を考える上で非常に重要な点である。ここで繰り返し強調すべきは、「快感原則の彼岸」は外傷的な反復という問題を語るときに、戦争（神経症）から幼児のセクシュアリティへとその関心を移行するという事実である。このことはいくら強調しても強調しすぎることのない点である。

この引用箇所で言及されている「エディプス・コンプレックス」と「幼児の性的な生活」に関してフロイトのテキストは、戦争という出来事を契機に、混迷を極めることになる。つまり殊に戦後のフロイトのメタ心理学的な思弁に独特の晦渋がここで注目に値する。その意味で触れておきたい先行研究として、ほとんど誤読すれすれのアクロバティックな精読により、フロイトの言語と論理の齟齬、矛盾、動揺、揺れをあぶり出す読解、ジュディス・バトラーとレオ・ベルサーニのフロイト解釈である。結論から先に言えば、彼らに共通するのは次の態度である。つまり、男性主体のホモセクシュアリティをエディプス的な物語に回収できない「外傷的な過剰」として語ってしまうフロイトを重視する態度がそれである。

教科書的な理解では次のような解説になるだろうか。「多形倒錯」に翻弄された乳幼児のセクシュアリティを男／女というジェンダー区分に従ってそれぞれヘテロセクシュアルな欲望へと収容することを旨とするフロイトのエディプス物語——普通の読解ではこの露骨なヘテロセクシズムが悪名高いわけであるが、バトラーとベルサーニの精読は、この悪名高きフロイディズムを攪乱するラディカルに「アンチ・フロイト的」な要素を他ならぬフロイトのテキストに読み抜くことになる。いわばヘテロセクシストとしてのフロイトの言語のクイア的な混濁にこのうえなく繊細な読解を両者は実践している。たとえば、男の子にとって根源的であるはずの母親への（ヘテロな）欲望を可能にするものとして、メランコリックに抑圧された父親への（ホモセクシュアルな）欲望をバトラーは強調する。原初の享樂の対象たる父のこのうえなく痛切な喪失ゆえに、（乳）幼児的な主体はその対象（父）とメランコリック（＝ホモセクシュアル）に同一化することによって、父と同様なヘテロな

男性主体をテロスとする成長過程を開始する、というシナリオがそれである。エディプスの物語の根幹にあるはずの男の子の「母」へのヘテロな欲望の前提（前史）として想定＝思弁される抑圧された「父」へのホモセクシュアルな欲望。当然、精神分析の原則からすれば、抑圧されたものは回帰することになるはずで、それは外傷的な反復という症状を形成することにもなる。³⁾ 原初の乳幼児の男性同性愛的享樂は、エディプスの物語／歴史に回収＝抑圧されきれない「過剰な残余」として外傷的に反復強迫する、と記述することも可能であるだろう。

ベルサーニの場合ならば、男性主体のホモセクシュアリティの過剰な強度に躊躇いがちに言及するフロイトのテクストの揺れを読み解きながら、とくに「文化への不満」の注釈で触れられた肛門を巡る嗅覚の強度と男性同性愛についてのフロイトの恐るべき思弁に触れている（男性の肛門が発する臭気と男性同性愛的な享樂との関連についての思弁）。これも「正常／ヘテロな」欲望を組織するエディプスのプログラムに回収できない「過剰」ということになるだろう（ベルサーニ 33-44）。同時に、これは、あのイヴ・セジウィックがおもにイギリスのゴシック小説に関して問題にした「男性ホモセクシュアル・アブジェクション」とでもいうべき、もっと露骨に言えば「肛門粘膜系」とでも評すべき「リアルなもの」を想起させもする。あのクリステヴァなら言語の獲得、つまりはエディプスのプログラムとともに喪失する「母なるもの」として凡庸に表象したあの「アブジェクション」的な「もの」を、セジウィックは「父なるもの」をめぐる男性ホモセクシュアリティという文脈で歴史化したことになる（セジウィック 特に5, 6章）。この歴史記述においては、イギリス「近代」それ自体がエディプス的な歴史性を帯びる。

話を整理すれば、バトラー、ベルサーニ、セジウィックといった読み手たちが問題とするのは、フロイト理論の根幹たるエディプスの物語に収容できない「外傷的な過剰」としての「男性ホモセクシュアリティ」である。この欲望の強度は、エディプスのプログラムにより主体化した／去勢された男性のヘテロセクシュアリティをとときに攪乱する「外傷的な過剰」と呼ぶべきものがある。

ここで強調すべきは次の点である。フロイト的なエディプス理論がその成長物語における完成型として想定するヘテロセクシュアルな男性主体は、ラカン的に言えば言語の獲得と密接不可分な関係にあるのだが、これに回収さ

れない「外傷的な過剰」としての原初的なホモセクシュアリティは「不可能なリアル」と呼ぶべき強度を帯びた「享楽 jouissance」と等価である、ということ。ラカンの用語で言う「享楽」とは主体の存在を不可能にする、ほとんど「狂気」に隣接した領野、ベルサーニ風と言えば主体を四散する「自己破碎 self-shattering」とでも評すべき強度を帯びることになる。つまりそこには、自己をばらばらに破壊しようとする「根源的なマゾヒズム」を想定＝思弁できるわけで、フロイトが大戦直後「快感原則の彼岸」において思弁した外傷的な過剰たる「幼児のセクシュアリティ」の「反復強迫」が「死の欲動」と連動する理由の一端がここにある。

ここで話を整理すれば、第一次大戦という出来事がフロイトに思考を強いたのは、エディプス的な物語に回収できない「外傷的な過剰」、人間的主体が自らをばらばらに破壊しようとする原初的な「享楽」のマゾヒズム的な強度である、という解釈が成り立つ。さらに言えば、その重要な（症）例が、パトラー、ベルサーニ、セジウィックらが精読した、原初的な享楽としての男性ホモセクシュアリティの「リアルな」強度ということになる。そのような視点を確保した後に、たとえば「快感原則の彼岸」のあの恐るべき論理（戦争神経症＝幼児の性愛）を想起するのならば、私たちは次のような等式に逢着することにならないか。つまり、大戦後のフロイトの思弁が示唆するのは、戦争＝享楽（根源的なマゾヒズム）という等式である。この点については後に触れることになるだろう。いずれにしてもここでふたたび強調すべきは、不在の「戦争」は、過剰なる残余としての幼児（同）性愛として（戦争）神経症的に反復強迫するということである。文脈は異なるがここで想起するのは、かつてこう喝破した柄谷行人の洞察であるだろうか——「フロイトの精神分析の枠組みを変えたのは、観察される事実としての戦争ではなく、病において反復される戦争なのだ」（82）。

さて、このような大戦後のフロイトの思弁を視野に入れるとき、それとの間テクスト性において『ダロウェイ夫人』をどのように読むことができるだろうか。すでに私たちは古典的な研究として1989年のエリザベス・エイベルの解釈を知っている。その読解によれば、ウルフはフロイトのエディプス的な発達理論を引用しながら、それへの批判を試みていることになる。その際注目されるのは、クラリッサ・ダロウェイであった。ウェストミンスター在住の保守党議員の奥方の身体を突如襲うレズビアン的リビドーを、エイベル

は、エディプスの物語に回収できない「外傷的な過剰」として読むことを可能にしていた。ただしエイベルに欠如しているのは、こういったエディプスの物語の根源的な不可能性を、フロイトの戦後のテクストそれ自体が語っているという視点である（もっとも反フロイト的な理論的強度は他ならぬフロイトの言語が蔵している）。さらにこの研究に欠如しているものは、同じような「外傷的な過剰」をクラリッサの「分身」たるセプティマスにも読み取る姿勢である。

それでは、セプティマスについて見てみよう。たしかに、彼については、上官エヴァンズとの同性愛的な関係⁴¹がそこはかたなく暗示されているといった程度のごとは通常論じられるが、読解がそれ以上に進むことはほとんどない。しかしながら、ウルフの言語は、クラリッサの時ほど露でないやり方で、男性ホモセクシュアリティの過剰な強度がセプティマスの身体に外傷的に反復することを暗示している。フロイトの言語と同じく、外傷的に反復するのは戦争それ自体ではなく、根源的なホモセクシュアリティの「リアルな」享樂である。

So, thought Septimus, looking up, they are signaling to me. Not indeed in actual words; that is, he could not read the language yet; but it was plain enough, this beauty, this exquisite beauty, and tears filled his eyes as he looked at the smoke words languishing and melting in the sky and bestowing upon him in their inexhaustible charity and laughing goodness one shape after another of unimaginable beauty and signaling their intention to provide him, for nothing, for ever, for looking merely, with beauty, more beauty! Tears ran down his cheeks.

It was toffee; they were advertising toffee, a nursemaid told Rezia. Together they began to spell t...o...f...

'K...R...' said the nursemaid, and Septimus heard her say 'Kay Arr' close to his ear, deeply, softly, like a mellow organ, but with a roughness in her voice like a grasshopper's, which rasped his spine deliciously and sent running up in his brain waves of sound which, concussing, broke.... Happily Rezia put her hand with a tremendous weight on his knee so that he was weighted down, transfixed, or the excitement of the elm trees rising and falling, rising and

falling with all their leaves alight and the colour thinning and thickening from blue to the green of a hollow wave, like plumes on horses' heads, feathers on ladies', so proudly they rose and fell, so superbly, would have sent him mad. But he would not go mad. He would shut his eyes; he would see no more. (23-4; emphases added)

あの有名な飛行機の場面であるが、下線部にあるようにここに読めるセプティマスの快樂は、シニフィアンの物質性に晒される快樂 (t...o...f...)、言語獲得以前の乳幼児の快樂としてクリステヴァあたりが美学化する前エディプス的な快樂である、と一応のところは読むことができる。

しかし、同時に指摘すべきは、セプティマスが幼児性愛的な快樂にまみれるこの飛行機の場面には、ペニスの欲望を読むことができる。

And now, curving up and up, straight up, like something mounting in ecstasy, in pure delight, out from behind poured white smoke looping, writing a T, an O, an F" (31)。

ここに読むべきは、勃起しきったペニスが白濁した精液を射精するイメージであるだろう。セプティマスが全身まみれるように幼児（性愛）的に享樂する対象は、精液を出す屹立したペニスである。ここに読むべき原初的な享樂の対象は、クリステヴァが美学化するような水準（母なるもの）で読むべきものではなく、むしろ男性的主体を不可能な強度において狂気＝享樂へと導くもの（＝父なるもの）であるはずだ。先ほどの長い引用箇所の下線部においてもそれは明らかである。

つまりここで強調すべきことは、戦争神経症ないしはシェル・ショックに通常結び付けられて解釈されるセプティマスの「狂気」とは、同時代のフロイトが戦争を契機に思弁したあの原初的な男性ホモセクシュアリティという「外傷的な享樂」と同じ文脈を共有している、そういった間テクスト的な可能性ではないか。

その意味で強調すべきは以下の点であるだろう。つまり、このように前エディプス的な強度としてのシニフィアンの物質性の露呈として表象される白い精液を噴射するペニスを全身で享樂するセプティマスを突如襲うのは、定

義上正しく、あの上官エヴァンズのイマージュである——“White things assembling behind the railings opposite. But he dared not look. Evans was behind the railings” (27; emphases added)。ここでさらに注目すべきは次の点である。まずはエヴァンズが「白いものが集まった」存在として映像化されていること。その「白いもの」が暗示するところはもはや明らかであるだろう。次にエヴァンズの立ち位置が鉄柵 (railings) の背後である点、これが重要である。この小説を読んだ者なら誰もが記憶しているように、セプティマスは自分が住むブルームズベリのフラットの窓から同じく鉄柵 (railings) めがけて投身自殺をし、その鉄柵に挿し貫かれて絶命する。その暗示ももはや明らかである。

Coming down the staircase opposite an old man stopped and stared at him. Holmes was at the door. ‘I’ll give it you!’ he cried, and flung himself vigorously, violently down on to Mrs. Filmer’s area railings. (164; emphasis added)

He had thrown himself from a window. Up had flashed the ground; through him, blundering, bruising, went the rusty spikes. (201-2; emphasis added)

最初の引用は、クラリッサによる表象であるが、クラリッサはこの分身の死の場面を『オセロー』を引用しながらヴァグナー的な「愛と死」といった主題に美学化する。これは言うまでもなく、フロイト／ラカンの「死の欲動」としての「享楽」の表象としては陳腐なまでに——つまりは不正確なまでに——典型的なものである。この二つの引用に関して、たとえば、「錆びた鉄柵 rusty railings」の rusty の r をラカンのいう換喩的な連想にしたがいIに書き換えてみたり、rail という単語の俗語的な意味に「尻」なり「勃起」といった語義があると付け加えてみるのは、もはや蛇足というべきあるだろう。

小論の結論をここで提出しておきたい。『ダロウェイ夫人』を同時代のフロイトの精神分析と並列して読むとき、特にその読解を「戦争と外傷」という文脈で実践するときには私たちの目に見えてくるのは、戦争が戦争それ自体として外傷的に反復されるのではなく、それが「過剰な享楽」として反復されているという点がある。あるいはこう言い換えることも可能だろうか。戦争は、

主体を「狂気」あるいは「死」に至らせる「享楽」としての男性ホモセクシュアリティの過激な強度として外傷的に反復している、と。⁵⁾ 戦争が「享楽」として外傷的に反復する——ウルフとフロイトの言語が同時に実践するこのテクスト的な身振りは、あきらかに大戦直後に文学と精神分析が切り結んだもっとも「リアルな」間テクスト性を露にしている。

註

*小論は、第7回英語圏文学研究会「戦争と英語圏文学」(2007年3月17日 於：青山学院大学)において読まれた招待講演のための原稿に基本的には基づく。その際に貴重なコメントを頂戴した富山太佳夫青山学院大学教授、麻生えりか同准教授に謝意を表明したい。

- 1) ただしこの研究会において富山教授が指摘された点——つまり多くのモダニズムのテクストが戦争それ自体に一般に寡黙であるのは、同時代のほかのテクスト群が戦争に関する表象を大量生産していたために、最小限度の言及で多くを示唆することができたからである、という歴史的な事実——にも言及をする必要があるだろう。同時にここで付言すべきは、小論の議論はそういった実証的な歴史記述とは本質的に異なったテクスト的な次元に注目している、という点である。
- 2) 模範的な記述としては、文化論的な水準でこの概念を駆使した、たとえば、キャシー・カルース、あるいはその訳者である下河辺美知子を参照されたい。
- 3) バトラーのこの水際立ったフロイト読解に関する同様に水際立ったというべきプリリアントな読解として、村山敏勝の論考を挙げておきたい。
- 4) この関係はロレンスの『プロシア仕官』を髣髴とさせる態のものであるが、ロレンスの特に詩における男性同性愛的享楽と戦争との同一視について、有為楠泉(名古屋工業大学教授)は、「イマジズム戦争詩と*Women in Love*」と題された口頭発表において示唆に富む読解をしている(第41回日本ロレンス協会大会：2010年6月26日土曜日、於：早稲田大学)。ちなみに小論の筆者がそのセッションの司会を務めた。
- 5) 無論このような主題を重層決定している歴史的なイデオロギー素として、第一次大戦における「戦友」間の絆という点を実証的な水準で指摘する必要もあるだろう。典型的な研究としては、Coleを参照のこと。

引用文献

- Abel, Elizabeth. *Virginia Woolf and the Fictions of Psychoanalysis*. Chicago: U of Chicago P, 1989.
- Cole, Sarah. *Modernism, Male Friendship, and the First World War*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Parsons, Deborah. “Trauma and War Memory.” *The Cambridge History of Twentieth-Century English Literature*. Eds., Laura Marcus and Peter Nicholls. Cambridge: Cambridge UP, 2004, 175-96.
- Woolf, Virginia. *Mrs Dalloway*. 1925. London: Penguin, 1996.
- ジークムント・フロイト「快感原則の彼岸」『自我論集』中山元訳、ちくま学芸文庫、1996年。
- キャシー・カルース『トラウマ・歴史・物語——持ち主なき出来事』下河辺美知子訳、みすず書房、2005年。
- 下河辺美知子『トラウマの声を聞く——共同体の記憶と歴史の未来』みすず書房、2006年。
- 村山敏勝「主体化されない残余≠去勢」『現代思想』第28巻第14号（2000年）：187-99。
- レオ・バルサーニ『フロイト的身体——精神分析と美学』長原豊訳、青土社、1999年。
- イヴ・K・セジウィック『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年。
- 柄谷行人「死とナショナルイズム」『定本・柄谷行人集4 ネーションと美学』岩波書店、2004年。